



中高生と大学生のための災害ボランティア～遠隔地からできること～

杏林大学保健学部看護学科看護養護教育学専攻

山内亮子 石野晶子 藤田千春

活動の概要・目的

災害時には、報道された被災地の映像などを繰り返し見たことで、被災地以外に住む子どもたちや大学生までもが心の負担を感じ、被災地の子どもたちと同様のストレス反応を示すことが報告されている。2024年1月の能登半島地震においても、遠隔地の子どもたちや大学生への影響が懸念された。そこで本活動の目的は、災害被災地から遠隔地にあたる本学周辺の中高生、本学学生を対象に、災害時の支援について学び、長期的な情緒的支援の必要性や互いの意見交換により、「自分たちにもできることがある」という実感を得て支援者としての準備性を高める機会を提供することとした。参加者同士のアイデアを出し合い形にすることにより、災害による心の負担を緩和しながら、支援者としての視点を持つことに寄与することを目指した。

活動① 中高生と大学生のための災害支援ワークショップの開催

2024年8月8日(木)、井の頭キャンパスA109教室にて「中高生と大学生のための災害支援ワークショップ」を開催した。

プログラム

1. 話題提供「能登半島地震とのつながり」
2. グループワーク①
「災害情報を見て、どんなことを思った?を共有しよう」
3. ミニ講義
「時間の経過による被災者の状況の変化について知ろう」
4. グループワーク②
「自分たちにできること、できそうなことはなんだろう」
5. 共有・まとめ・お知らせ

参加者総数11名

内訳は、中学1年生1名、中学3年生1名、高校2年生1名、高校3年生5名、大学生2名、保護者1名であった。

教員からの話題提供をきっかけに、グループワークでは最初はお互いに様子を見ていた参加者たちが、次第に「震災当日はこんなことを思った」「こんな経験をした」と意見を出し合い、それを付箋に書き出していく様子がみられた。また、自分たちにできることを考えるグループワークでは、「筋トレのメニューを動画で紹介する」「音楽を配信する」といった中高生参加者の得意なことを活かしたアイデアが次々に出された。

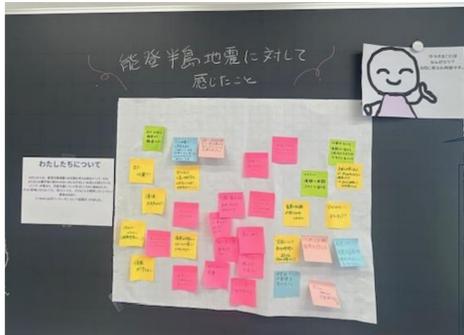


参加者の声

- ・平日頃から災害について考えどのような支援をすることが適切なのかを理解することが出来た。
- ・今後も災害ボランティアワークショップにぜひ参加したいと思った。
- ・異なる年代の方と能登半島の震災について話し合い、様々な意見や体験を聞くことが出来た。
- ・今回の活動を通して災害看護に興味を持ち、他のボランティアにも参加してみたいと思いました。

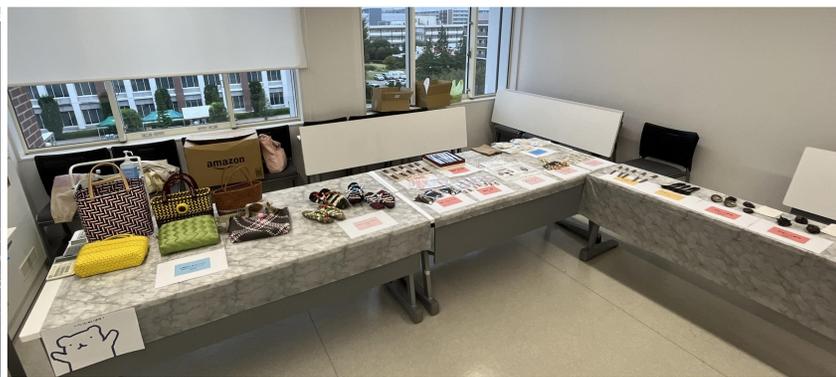
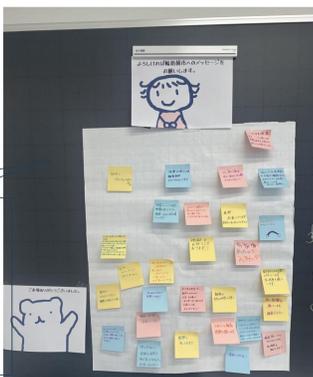
活動② 杏林祭での委託販売「ようこそ！輪島朝市！」

震災時の火災と9月の水害で大きな被害があった輪島朝市の雑貨を、杏林祭で販売し、収益を輪島朝市にお届けした。本学学生8名が参加し、収益161800円を輪島朝市に届けることができた。



8月のワークショップの成果物も展示。

来場者から輪島朝市へのメッセージボード。多くのメッセージが寄せられた。



活動③ みんなの災害支援ワークショップの開催

2025年2月27日(木)、井の頭キャンパスA110教室にて、「みんなの災害支援ワークショップ」を開催した。

珠洲市在住の竹下あづささんをゲストスピーカーに迎え、「能登の今、日本の未来」をテーマに震災当日から現在に至るまでの経験や支援活動の取り組みについてお話いただいた。報道が少なくなった能登の現状をより多くの方に知ってもらうべく、学生以外の参加も受け付けた。参加者は総数22名であった。

プログラム

1. 講演「能登の今、日本の未来」
2. グループワーク① 感想シェア
3. グループワーク② 自分たちにできることとは?を考える

参加者の声

- ・現地の方のリアルな声をきいて、忘れないことって大切だと思いました
- ・私にできることを小さいながらもやっていたらと思います
- ・すぐに具体的に何か行動できなくても、ずっと忘れることなく、気持ちを寄せ続けていきたいと思っています

講演後のグループワークでは、ゲストスピーカーを交えて、活発な意見交換が行われた。また、「自分たちにできることとは?」について考え、付箋に書き出すワークでは、「震災のことについて知って、忘れないでいる」「ずっと心を寄せ続ける」「旅行に行く」といったアイデアが出された。



まとめ

ワークショップの開催と杏林祭での委託販売の活動を通して、機会があれば支援につながる活動をしたいと考える人がいること、被災地に心を寄せる人たちがいることがわかった。そして、中高生と大学生という若い世代の人たちも「将来ではなく今の自分にできること」を見つけていくことができていた。忙しい生活を送る中高生・大学生世代には、支援につながる活動をするための場がときどき設けられ、自由に参加できる「ゆるやかさ」も必要であると考えられた。また、学生以外の参加も受け付けた「みんなの災害支援ワークショップ」では、幅広い世代の人たちが集まり、それぞれの考えを共有することで「今自分にできること」を考えることにつながった。「被災地の人たちが一番恐れているのは、『忘れられること』です」という竹下さんの言葉から、忘れずに心を寄せ続けることに意味があり、支援につながることを改めて学ぶことができた。「忘れていない」ということを伝えていくために、今後は、参加者の声やアイデアをホームページやSNSなどを通して発信していく活動にもつなげていく予定である。